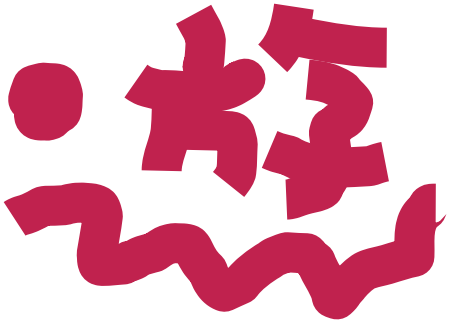
遊び仕事の自然共生・Subsistenceな生き方の再考

ー自立自存の今日的価値に関連してー

京都府立大学大学院・生命環境科学研究科
三 橋　俊 雄

DESIGNシンポジウム、京都大学、20121017

遊び仕事



遊びをせんとや生れけむ
戯れせんとや生れけむ
遊ぶ子供の声聞けば
我が身さへこそゆるがるれ

梁塵秘抄

平安時代末期、貴族社会で流行した今様歌謡、
編者・後白河法皇　1180年頃

Homo Ludens
ホモ・ルーデンス

Johan Huizinga

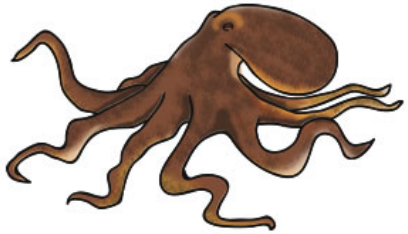
遊戯人

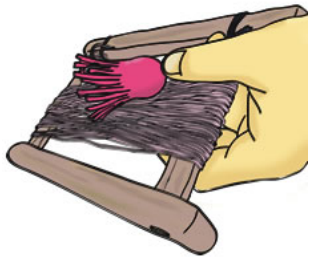
遊びの本質

アソビを生業とする遊女が、まるで遊ぶために生まれてきたみたいに、
無心に遊ぶ童子らの声を聞いて、
人間は苦しい道のりを歩まなくてはならない存在であるけれど、
だからこそ、遊び戯れる子供の声の可憐さ・いとおしさに
自分の身体も心も動かされる

遊び仕事とは

1）タコ釣り、イカ釣り、山菜採りなど　京都府宮津市養老地区





「食べたいな」と思ったらマダコを釣りに行く。雨上がりには、なぜかマダコは止まるたびに体の色が真っ白になり、すぐ見つけることができる。この絶好の機会をのがさないように、雨がやむと、タコを探しに、急いで堤防に行く。マダコがつれるのは４月ごろか10月ごろまで。10月になるとマダコを食べるミズダコが堤防近くに住み替えるため、逃げてしまう。

2）ウサギ捕り・バイ投げ、ウナギ捕り、山菜採りなど

京都府宮津市養老地区・上世屋地区、京都府南丹市大野地

3）にごりすくい　京都府宮津市由良地区、京都府南丹市大野地区

4）手長エビ漁　京都府宮津市由良地区

5）畑しごと　京都府宮津市養老地区

「遊び仕事」概念の登場

＜環境問題＞
1950’ｓ （水俣病） ー 企業の公害問題
1960’ｓ （光化学スモッグ、海川の汚染） ー 都市公害問題
1970’ｓ （文明的生活に起因する環境問題）

▼

ーしかし、これらは、人間中心主義的(anthropocentrism)な環境理論ー
（自然環境は人間によって利用されるために存在する）

▼

持続可能な（Sustainable）社会に向け、われわれの生活はどうあるべきか

▼

＜環境倫理学＞
自然や環境のあり方を問う前に
「自然と人間の関係」のあり方を問い直し

▼ （自然中心主義）

自然と人間が共存するための社会を考える

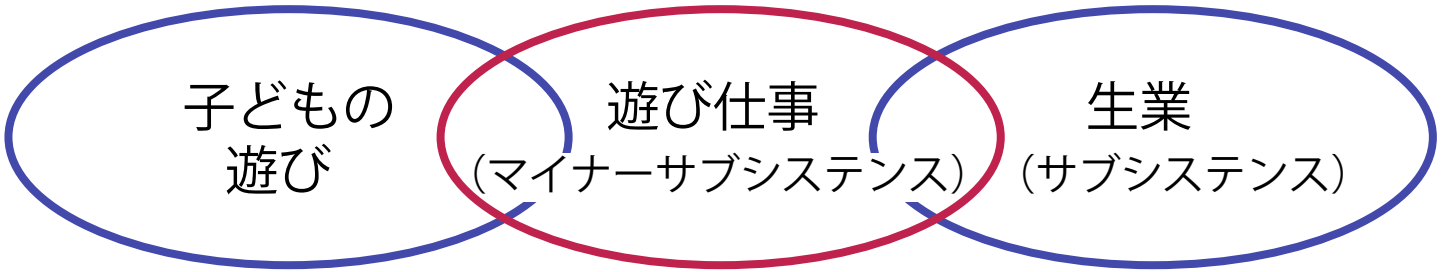
▼

＜＜ 遊び仕事・Minor Subsistence＞＞

遊び仕事とは

例えば、海の「タコ・イカ釣り」、川の「ウナギ捕り・サケ捕り」、山野での「ウサギ狩り・山菜摘み」など、

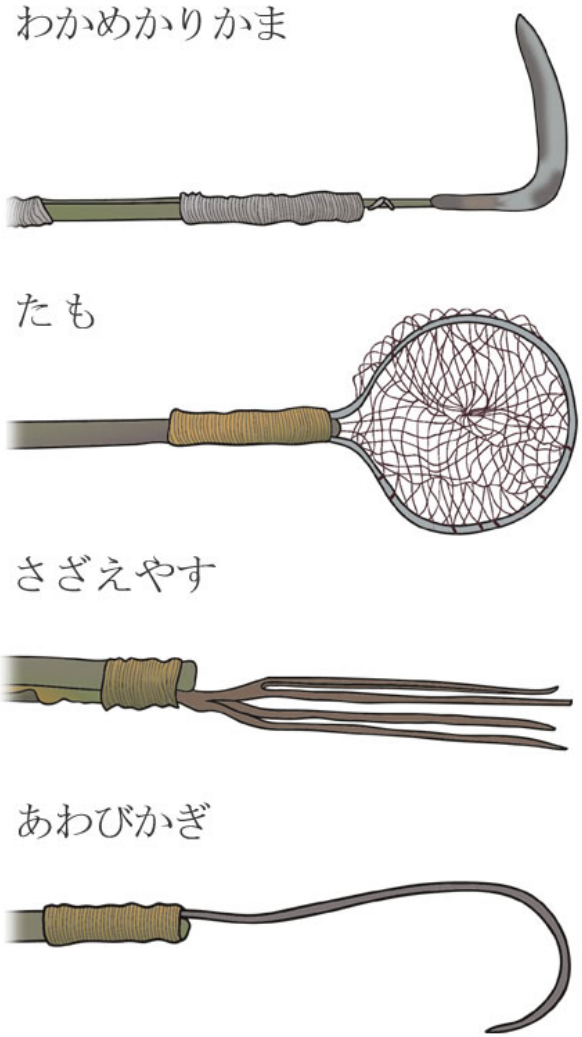
大人たちがワクワクと胸おどらせながら
自然のなかに身をおき、身体を媒介として
獲物などとの出会いを求め、捕獲し、食べる行為



それは「子どもの遊び」と「経済活動としての生業（サブシステンス）」との中間に位置する

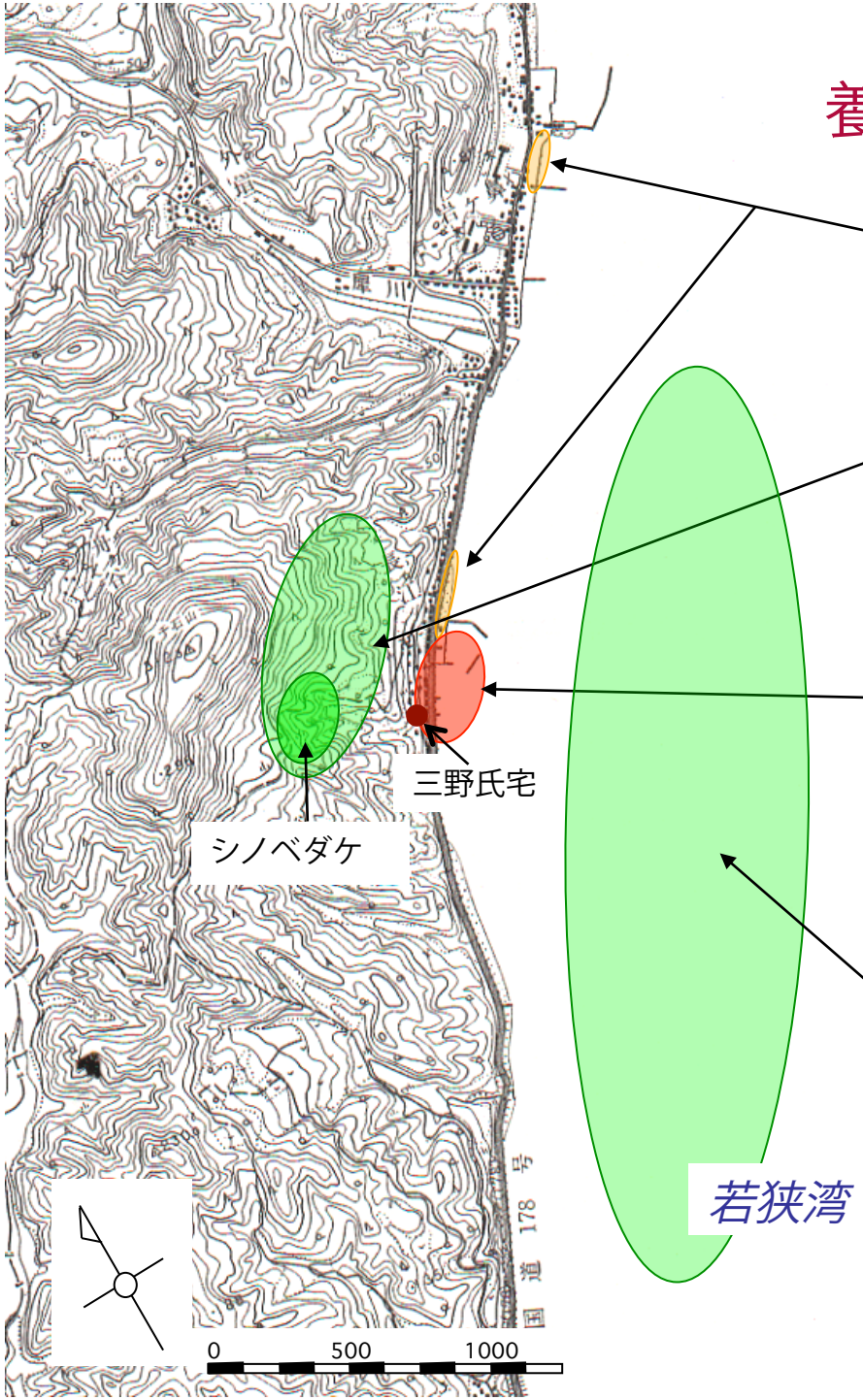
養老・M氏 の遊び仕事（宮津市養老地区）

M氏と船を操るマネキ、箱めがね、刺し網とM氏の船



上図：M氏 の海の道具

養老・M氏 の遊び仕事と遊び空間



6月下旬～11月上旬：ハマチ（スナガニ）掘り
（あそび時間：10分）

冬----------：藤蔓、アケビ蔓
正月明け----：芹（七草かゆ用）
春：3月-----：フキ（ノブキ、アカブキ）、フキノトウ
4月----------：ワラビ、ゼンマイ、ツクシ
4月中～5月：タケノコ
秋----------：クリ、アケビ（シロアケビ、アカアケビ）、
ウベ、シイノミ、ジネンジョ
（あそび時間：2～3時間）

4、5月～10月：タコ釣り（マダコ）
冬はミズダコと入れ替わる
（ミズダコの餌がマダコ）
（あそび時間：1時間）

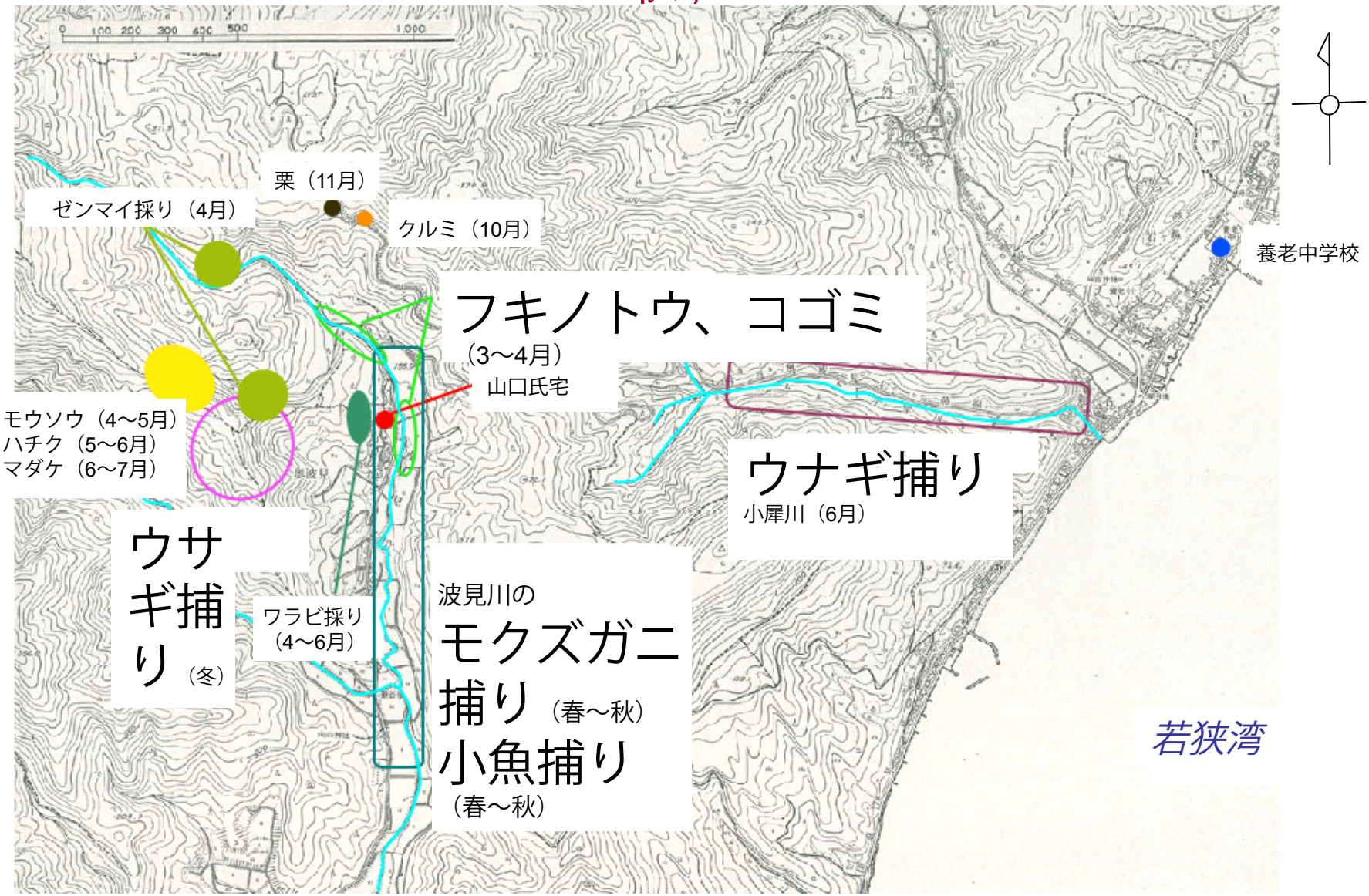
イカツケ（イカ釣り）：
＜日中＞10月中旬-12月：タルイカ
天気のいい日に、水面を泳いでいるところをカギで引っかける
＜夜間＞ 9月中旬-11月：アオリイカ
一晩で100杯も釣ることもあ
（あそび時間：6時間）

養老・M氏 の遊び仕事暦

		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
海	アワビ漁　＊＊			＞									＜
	サザエ漁　＊＊	＜											＞
	テングサ　＊＊							＜ ＞	2〜3週で終わり				
	ウゴ漁　＊＊							＜ ＞	2〜3週で終わり				
	ウニ漁	潜水漁											
	モズク漁　＊＊				＜ ＞		4月中旬〜5月上旬						
	アゴ（トビウオ）漁　＊＊					＜	＞	5月中旬から6月いっぱい					
	マタコ・ミズダコ漁　＊＊	＜ ミズダコ		＞	＜ マダコ		（6〜9月は堤防や磯からもとれる）						＞
	刺し網漁　＊＊	＜カワハギ、グレ、イシガキダイ、ガシラ、アコウ、シマイサキ、サニゴ、メバル＞											
	ワカメ漁　＊＊			＜		＞	5月中旬までに3回刈る						
	モンドリ漁（タコ捕り）						カワハギ、ドノケをエサに						
	秋イカ釣り　＊＊	手釣り、船、疑似餌、夜光虫に疑似餌があたり光る											
	カマス釣り　＊＊						竿の一本釣り						
	ワタリガニ				最近、かかりが悪くなっている								
	アマダイ、レンコダイ				8月〜10月がピーク、　テグスの沖刺し網								
	ホウボウ、マダイ、キダイ				8月〜10月がピーク、　テグスの沖刺し網								
陸	ワサビ（根）												
	ワサビ（葉）												
	フキノトウ												
	葉サンショ												
	タラの芽												
	コシアブラ												
	タカノツメ												
	ワラビ												
	ササユリ（花）												
	アケビ												
	ジネンジョ												
	柿ぼり、オオミノ												

解禁日あり　　＊＊ 皆がやっている

奥波見・Y氏 の遊び仕事と遊び空間（宮津市養老地区）



由良・Y氏の遊び仕事「手長エビ漁」（宮津市由良地区）

モンドリで手長エビを捕る。YA氏は、6月から12月まで由良川で手長エビ漁を行う。11の仕掛け（モンドリ）にサナギを入れて、円錐形の蓋をして、紐の一端を石に結わえて、由良川べりに11カ所ほど沈めておく。2日に一回、Y字の枝にひっかけて、仕掛けを引き上げると一つのモンドリに7～8尾、計80尾ほど捕れる。再び、サナギを加えて川に沈める。手長エビ漁は自給自足だという。以前は竹製のモンドリであった。

にごりすくい（宮津市由良地区、南丹市大野地区）

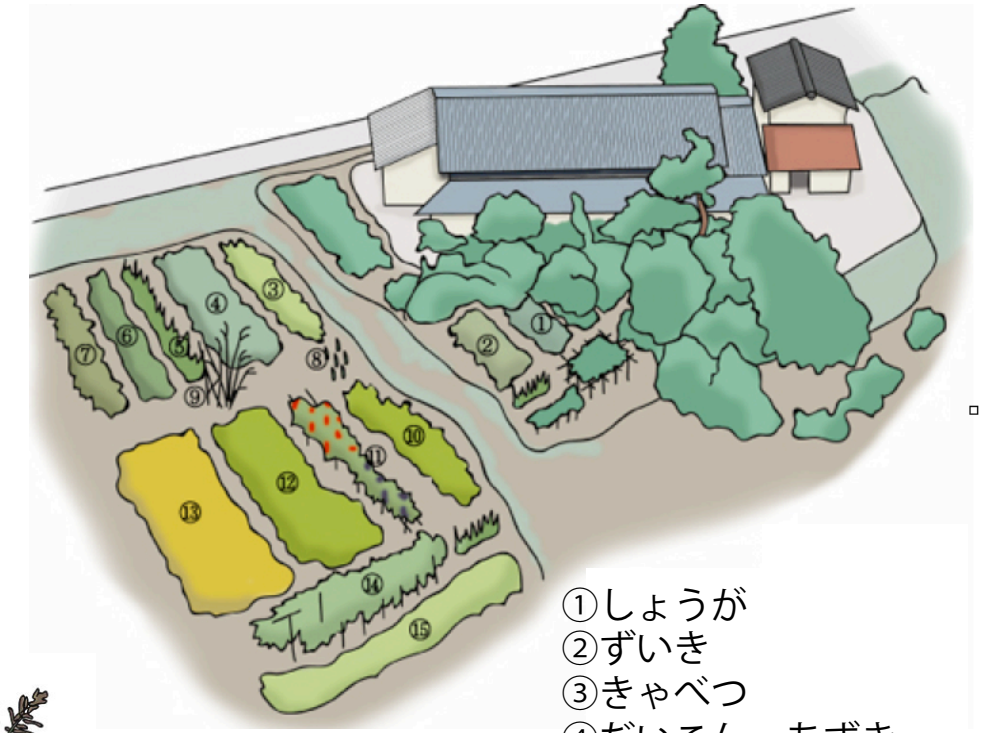
大雨で川が濁ったとき（水中の酸素不足で）魚がふらふらし、よどみに集まってきたところを、タモで背後（流れの川上）からすくい捕る漁法。

アユもコイもウナギもいっぺんに捕れたらこんなおもろい漁はないという。戦後30～40年頃まではやっていたが、しばらくして禁止になった。

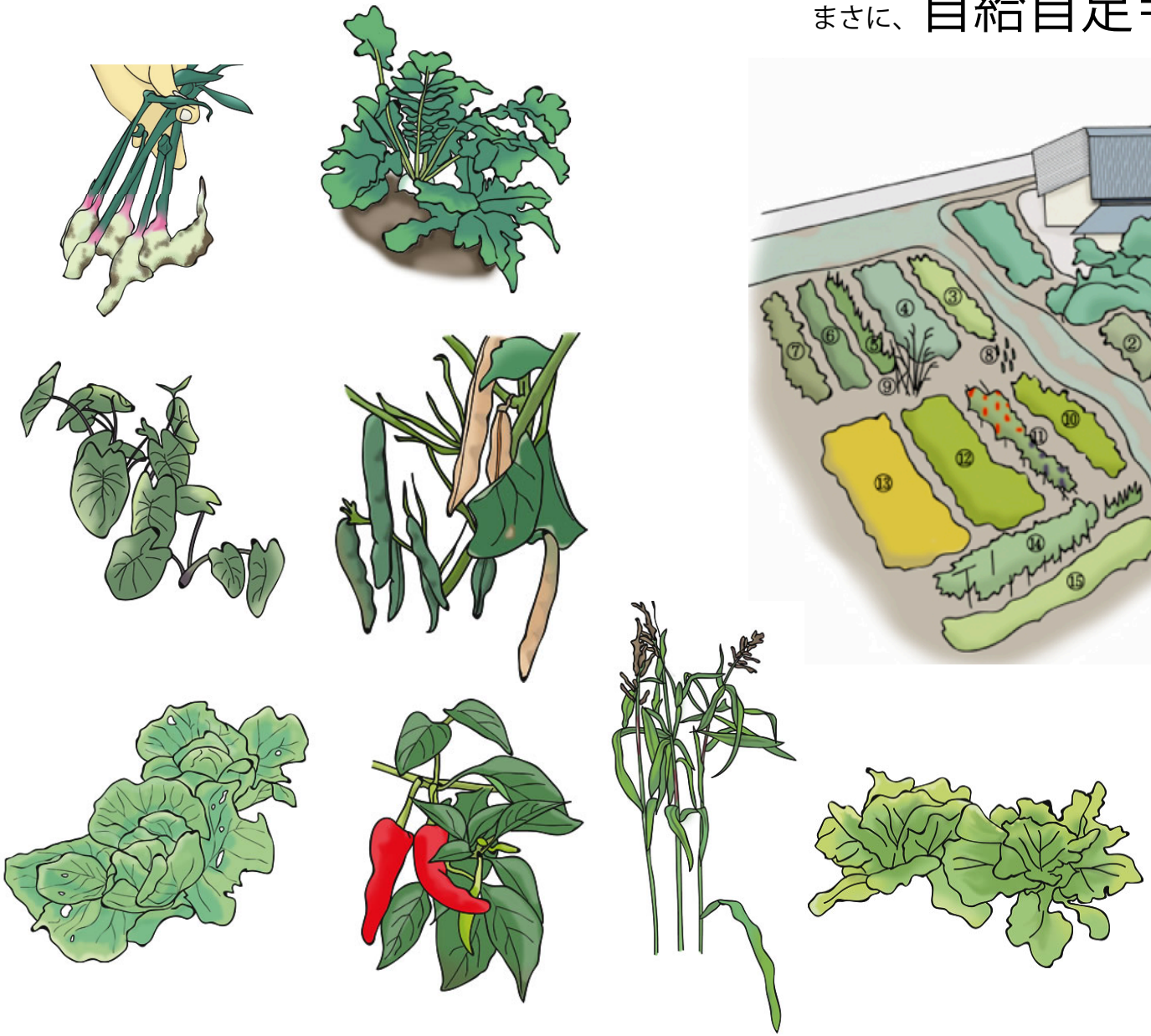
タモは、杉の枝をうまく曲げて、直径数ミリのしなやかな枝先を両方から重ねあわせて糸で縛って輪を作る。柄の長さは、４メートルほど。自然の造形を合理的に利用した「ブリコラージュ」といえる。網の部分は絹糸を使用して女性たちが編み、毎年柿渋につけては干し、補強した。

畑しごと（宮津市養老地区）

「食べたいもの」を植える、
まさに、自給自足＝遊び仕事の世界



①しょうが
②ずいき
③きゃべつ
④だいこん・あずき
⑤ねぎ　⑥あずき
⑦くろまめ　⑧にんにく
⑨たかきび⑩はくさい
⑪ししとう・とうがらし
ピーマン・なす　⑫
はくさい　⑬ずりきび⑭
トマト・ゆきわりまめ⑮
赤いじゃがいも



環境教育としての遊び仕事

世界では人口増加、地球温暖化、水ストレスなど、また国内に目を移すと少子高齢化、格差社会、無縁社会などの問題が顕著になるなかで

2002年12月の国連総会において
「国連持続可能な開発のための教育の10年」
ESD : Education for Sustainable Development（2005～2014）
が決議された。

それは、持続可能な世界の実現、***健康で文化的な生活***を保障し、***人と人のつながり、人と自然のつながり***を大切にする地域づくり、そして、それらの基礎となる教育の重要性をうたったものである。

本研究は、人間生活と自然が乖離し
（海山川に人が分け入らない）
ゆえに自然が荒廃しつつある現代社会において
自然共生型の生活文化と行動を内包する「遊び仕事」
に着目し

「遊び仕事」が
現代日本人の生活行動を自然共生に向かわせる
第一歩・ブレークスルー
となり得ると確信し

「遊び仕事」の今日的役割について検討してきた

加えて 筆者は
イヴァン・イリイチ（Ivan Illich）の主張である
「サブシステンス(自立自存)」 概念との出逢いから

従来の *「遊び仕事＝マイナーサブシステンス」* 定義が
「遊び仕事」を経済的活動（生業）としてのサブシス
テンスとの関連で定義付けされていることに対して

「遊び仕事」を
人間のサブシステンス（自立自存）な行為
すなわち ***「遊び仕事＝サブシステンス」***
として捉え直そうと考えた

折しも

東日本大震災が社会に与えた衝撃と影響は
従来の日本人の生活スタイルや価値基準を
大きく揺るがし

本来的な暮らしのあり方
サブシステンスな人間の生き方

を摸索し出しはじめたところでもある

由良・T氏のサブシステンスな生き方

1）手長エビ漁

・高級食材だが *（自給自足）* （市場には出さない）

・家族、友人たちと*食べきれる量だけを捕る（必要の観念）*

・仕掛け（モンドリ）は20基まで *（共同体の規範）*

2）浜でホカス小魚をもらい調理 *（もったいない・おすそわけ）*

3）筍・ミョウガ・ナスビの塩漬け、梅干しなど *（備え・保存観念）*

4）タラの芽は同じところから３度摘まない *（自己の行動規範）*

5）ほとんどの食材は *（市場経済に頼らない）*

6）多くの食材や物資が *（物々交換・おたがいさま）*

　本研究では、元来、自然との共生の中で行われてきた人間生活の諸活動が*「体制・市場・産業的サービス」の受け手*に甘んじ、

その結果、*ヴァナキュラーな生活・活動が消失し*、生活の自立・自存の基盤が破壊されつつある現在、*ほんとうの豊かさや人間らしい生き方、そして社会とは何かを求めて*、

現代社会において忘れかけ、消滅しかけている*「遊び仕事」を、人間のサブシステンスな行為・活動としてとらえ直し、*

その今日的価値と役割について再考・再評価する。

＜自然共生＞の視点から捉えた遊び仕事の価値

１）「遊び仕事」は, 人間行動の本質である「遊び」を媒介として、自らが自然と共生関係を結ぶ手立てとなり得るものであり、***楽しみや喜びを感じながら自然と共生できる貴重な文化的行為である***

２）「遊び仕事」は, ***自然と人間が対等に向き合える「等身大」の共生の場***であり、支配・被支配の関係をもたない自然中心主義の立場を有する人間の活動である

３）「遊び仕事」は、農山漁村の生活や自然の現場で, 自然共生のあり方を, 先人の知恵・生活技術として学ぶことができ、***臨地環境共生教育の場として現代に活かす***ことができる

＜自然共生＞の視点から捉えた遊び仕事の価値

４）「遊び仕事」は、自然共生のあり方を***「体験知」***として学ぶという点で、今日の情報化・バーチャルな社会環境において、***リアリティをもって自然を学ぶ場***を提供してくれるものである

５）「遊び仕事」は、自然と遊び, 自然と学ぶ***「豊かな自然共生型ライフスタイル」***へと私たちを導いてくれる、現代の共生社会を再構築するためのブレイクスルー（突破口）となり得るものである

＜サブシステンス＞の視点から捉えた遊び仕事の価値

１）「遊び仕事」における***労働***は決して重荷ではなく、その成果の有無にかかわらず、***自然の中に身をおくことの楽しみや喜びに通じるサブシステンスな行為***である

２）「遊び仕事」は、今日の、自然を領有し人間の自然に対する搾取的で破壊的な関係ではなく、***「十分をわきまえる」「足るを知る」観念、***言い換えれば, 現代社会に蔓延している際限のない欲望としての「ニーズ」ではない、***真に「必要」の観念***を有した人間の行動であり, 本来的な自然共生の姿勢を現したものとして評価できる

＜サブシステンス＞の視点から捉えた遊び仕事の価値

３）「遊び仕事」は、サービスの一環として与えられる技術（テクノロジー）を用いる行為ではなく、***自らの学びと技能（スキル）の修得をもとに行われるヴァナキュラーな行為***であるがゆえに、サブシステンスな人間行動であるということができる

４）「遊び仕事」は、それ自身、***「命」や「生きること」に直接つながる行為***であり、ゆえに、自然と調和しながら生きるために活動し、またその行為が新たな命を生み出し、命を維持する労働としても成り立っている

＜サブシステンス＞の視点から捉えた遊び仕事の価値

６）「遊び仕事」は, 個人的な利益やグローバルな競争、限りなき成長、すべてのものの商品化、新しい欲望の創出といった***市場原理主義の現在から解き放たれ***、自給自足, 自然共生、協力と相互扶助の原理に基づいた***コンビビアルな世界を指し示す人間行動の一つのモデル***としてとらえることができる

７）すなわち、「遊び仕事」は、今後、***私たちがどのように生きていくかの生活や自然との関係***についての本来的なあり方を、***商品の購入を前提としないで「良い生活」が得られる***ための、***新しい人間と自然の関係の一つ***として、「サブシステンス」の視点からわれわれの生き方を示唆してくれるものである